

構造拘束的な体験様式と心理的距離に関する研究

高沢, 佳司 / TAKASAWA, Keiji

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

117

(発行年 / Year)

2016-03-24

(学位授与番号 / Degree Number)

32675甲第380号

(学位授与年月日 / Date of Granted)

2016-03-24

(学位名 / Degree Name)

博士(学術)

(学位授与機関 / Degree Grantor)

法政大学 (Hosei University)

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00012938>

博士学位論文
論文内容の要旨および審査結果の要旨

氏名	高沢 佳司
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	第 603 号
学位授与の日付	2016 年 3 月 24 日
学位授与の要件	本学学位規則第 5 条第 1 項(1)該当者(甲)
論文審査委員	主査 教授 末武 康弘 副査 教授 長山 恵一 副査 名古屋大学大学院 教授 伊藤 義美

構造拘束的な体験様式と心理的距離に関する研究

〔1〕本論文の受理および審査の経過

高沢佳司氏は、本大学院人間社会研究科博士後期課程人間福祉専攻に 2014 年 4 月に入学後、指導教授・末武康弘、副指導教授・長山恵一より研究指導及び博士論文作成指導を受けてきた。高沢氏は現在、博士後期課程の 2 年次に在籍しているが、本人より 2015 年 5 月 29 日に早期修了申請が提出されたことを受けて、同年 6 月 17 日の人間社会研究科教授会で申請受理審査委員会が設置された。委員会は高沢氏の研究業績等を審査のうえ早期修了申請を受理し、同年 7 月 29 日の教授会で承認された。以上により、高沢氏の 2015 度における博士論文の提出が認められることとなった。なお、高沢氏は博士論文提出に必要な単位を 2015 年度中に取得見込みであり、また論文構想発表(2014 年 7 月)、論文中間発表(2015 年 7 月)を行う等、博士論文提出のための条件を満たしている。

2015 年 9 月 18 日に高沢氏から博士論文審査願及び学位請求論文が提出されたことを受けて、同年 10 月 7 日の人間社会研究科教授会において論文受理審査委員会（委員：末武康弘、長山恵一、服部環、図司直也）が設置され、委員会は高沢氏の論文の受理を認めた。同年 10 月 21 日の教授会において論文の受理が承認されるとともに、主査・末武康弘、副査・長山恵一、副査・伊藤義美（名古屋大学大学院教授）の 3 名による論文審査小委員会が設置された。各委員が論文の査読を行ったうえで、2015 年 12 月 20 日に口頭試問及び審査を実施し、3 名の審査委員全員が博士論文として合格に値すると判定した。

〔2〕論文の主題と構成

本論文は、体験過程理論における重要な構成概念である構造拘束的な体験様式と、自己とネガティブ表象との心理的距離に関する相関関係及び因果関係を提示することを目的とした実証的研究から構成されている。

本論文の構成は、以下の通りである。

第1章 先行研究の概観と問題点

第1節 体験過程理論の概観

第2節 先行研究の問題点

第2章 問題点の解決に関わる理論的背景と予測

第1節 構造拘束的な体験様式の測定可能性

第2節 反すうによる構造拘束的な体験様式の説明可能性とその背景

第3節 心理的距離

第4節 構造拘束的な体験様式とネガティブ表象への心理的距離との関連および背景

第5節 第2章のまとめと本研究の目的

第3章 構造拘束的な体験様式の測定および心理学的概念への置換

第1節 研究1：構造拘束度尺度の作成および妥当性・信頼性の検討

第2節 研究2：ネガティブな反すうによる構造拘束的な体験様式の説明可能性

第4章 構造拘束的な体験様式と心理的距離との関連

第1節 問題と目的

第2節 研究3：構造拘束度と感情価ごとの表象への心理的距離

第3節 研究4：構造拘束度と距離 - 感情価の連合強度

第4節 研究5：構造拘束度とネガティブ表象の活性

第5節 研究6：構造拘束的な体験様式が距離 - 感情価の連合強度に与える影響

第6節 研究7：構造拘束的な体験様式がネガティブ表象の活性に与える影響

第7節 研究8：Experiential manner as a mediating factor between clearing a space and self-efficacy

第5章 総合考察

第1節 本研究の結果の概観

第2節 体験様式を測定する尺度開発とその意義

第3節 反応スタイルによる体験様式の説明可能性と再定義

第4節 エビデンスに基づいた構造拘束度とネガティブ表象への心理的距離との関連

第5節 本研究による貢献と今後の課題

(なお、本論文の目次に記載されている各節の中の各項については、ここでは省略した。)

〔3〕論文の概要

本論文の第1章と第2章は、論文全体におけるいわゆる序論にあたるもので、先行研究の検討と問題点の整理、問題点の解決に向けた理論的背景と予測が論じられている。

第1章では、体験過程理論の概観として、構造拘束的な体験様式とは何か、構造拘束的な体験の特徴、フォーカシング、空間づくり、気がかりとの心理的距離、空間づくりと主

体感覚（自己効力感）について先行研究を検討しつつ論じ、さらに先行研究の問題点として、構造拘束的な体験様式の測定尺度が開発される必要性、心理学的概念によって構造拘束的な体験様式が再定義される必要性、構造拘束的な体験様式とネガティブ表象への心理的距離の関係を検証する必要性等を指摘している。

第 2 章では、まず構造拘束的な体験様式の測定可能性について考察し、反すうによる構造拘束的な体験様式の説明可能性が論じられ、心理的距離について主に解釈水準理論から検討したうえで、構造拘束的な体験様式とネガティブ表象への心理的距離との関連を理論的に予測している。そして、第 3 章及び第 4 章における実証的研究の必要性和結果予測を論じている。

第 3 章と第 4 章は、論文全体の中のいわゆる本論と言えるもので、調査的手法と実験的手法を用いた計 8 つの実証的研究によって構成されている。

第 3 章では、構造拘束的な体験様式を測定する尺度を作成し、また、その尺度とネガティブな反すうおよび抑うつ感を測定する尺度との関係を検証している。研究 1 では、個人の人格特性レベルで体験様式がどの程度構造に拘束されているかを測定するための尺度として、2 因子構造の 13 項目からなる「構造拘束度尺度 (the Scale for Structure-bound experiencing: SSB)」が作成され、その信頼性 (Cronbach の α が .83) と妥当性 (精神健康度調査 GHQ との相関分析及び重回帰分析で有意差が見られた、調査対象は大学生や社会人等計 373 名) が検証された。また研究 2 では、構造拘束度尺度 (SSB) とネガティブな反すう尺度 (RTS) 得点との間に正の相関 ($r = .66$, $p < .0001$ 、調査対象は大学生 149 名)、また、SSB と自己評定抑うつ尺度 (SDS) 得点との間にも正の相関 ($r = .60$, $p < .0001$ 、調査対象者は大学生 73 名) が見出された。

第 4 章では、まず第 1 節から第 4 節 (研究 3、4、5) において、構造拘束的な体験様式が、自己とネガティブ表象との心理的距離の近さとどのような関係にあるのかを検証している。研究 3 では、自己と表象の感情価との心理的距離の判断が構造拘束度 (高群・低群) によって系統的に変化することが質問紙調査によって明らかされている。これは大学生 149 名を対象として、感情価 (ポジティブ・ニュートラル・ネガティブ) をもつ単語をどのくらい身近に感じるかの回答結果が、SSB の高群と低群で差があるかを調べたもので、分散分析の結果、構造拘束度が高い人は低い人にくらべてネガティブ表象をより近く、ポジティブ表象をより遠く感じていることが示された。研究 4 では、研究 3 の結果を別の指標で再現することを目的とし、空間的距離 (近い・遠い) をターゲット、感情価 (ポジティブ・ネガティブ) を特性とした Implicit Association Test (IAT) の効果量による検討が行われた。これは大学生・大学院生計 49 名を対象とした実験的研究で、実験で得られたデータと SSB 得点 (高群・低群) の分散分析の結果から、構造拘束度が高ければネガティブ表象をより近いと感じ、低ければより遠いと感じていることが示唆された。さらに研究 5 は、研究 3 および 4 の結果をさらに別の指標で再現することを目的とし、感情価 (ポジティブ・ニュートラル・ネガティブ) の異なる単語への反応時間を自己照合課題によって測定する

もので、大学生・大学院生計 40 名を対象とした実験的研究である。ネガティブな語を自分に当てはまると判断した判断率とその反応時間が、SSB の回答結果（高群・低群）と相関分析によって解析され、ここでも構造に拘束された体験様式をもつ人ほどネガティブ表象に近いと判断する傾向にあることが示された。

第 5 節（研究 6）と第 6 節（研究 7）では、構造拘束的な体験様式に陥ると、自己とネガティブ表象への心理的距離が近くなるということについての因果関係を実験的手法によって検証している。研究 6 では、研究 4 で用いた IAT 効果量を従属変数とし、反すうによる実験操作によって構造拘束的な体験様式を経験する群と、気晴らしを行う群との比較が行われた。この実験は大学生 73 名に対して実施され、同時に SSB で構造拘束度を測定し、実験操作と人格特性との影響力の比較が検討された。この研究では、実験操作によって構造拘束的な体験様式が生じると引き続いてネガティブ表象への心理的距離の近さが生じることが示された。また研究 7 では、研究 6 の結果を別の指標で再現することを目的とし、研究 5 で用いた自己照合課題におけるネガティブな単語への反応時間が従属変数とした実験的検証が行われた。この研究では大学生 24 名を対象とし、ネガティブな語を自分に当てはまると判断した判断率及びその反応時間と、SSB の回答結果（高群・低群）との相関係数の分析によって、反すうによってネガティブ概念が活性化し、その結果ネガティブ表象が近く感じられるということが示された。ここから、ネガティブ表象の活性化が体験様式とネガティブ表象への心理的距離との間に媒介していることが示唆された。

第 7 節（研究 8）では、体験に伴う主体感覚（主体性・能動性の感覚）が得られれば構造拘束的な体験様式に陥ることなく精神的健康も維持されるとする変数モデル（吉良, 1998 によって提示されたモデル、ここでは「吉良モデル」と名づけられた）において、SSB がどの程度適合しているのか、その適合度を構造方程式モデリングによって示し、各変数間のパス解析による検討が行われた。対象は大学生 173 名で、SSB の結果と吉良モデルの適合度が検証された。その結果、モデルの適合度は十分なものであった ($\chi^2(2) = 2.11$ $p > .1$ 、GFI = .99、AGFI = .98、CFI = 1.00、RMSEA < .01)。

最後の第 5 章は、論文全体のいわゆる結論に相当する箇所である。この章の総合考察において、著者は、以上の実証的研究の結果が、体験過程理論に関する変数間の相関関係および因果関係を数量的に提示することによって、既存の理論の裾野を広げ得るものであることを論じている。具体的にはその理論的貢献は次の点ある、としている。

(1) 構造拘束的な体験様式と、自己とネガティブ表象への心理的距離との特性レベルでの相関関係の特定を行ったこと。

(2) 構造拘束的な体験様式が、自己とネガティブ表象への心理的距離に与える影響の因果関係の特定を行ったこと。

(3) 個人が構造拘束的な体験様式をどの程度経験しているかについて測定する尺度開発によって、吉良モデルに代表される理論モデルの適合度検証のような、構造方程式モデリングを示したこと。

著者は以上から、本論文の実証的知見がもたらす理論的貢献によって、体験様式と心理的距離という体験過程理論の変数に着目した新たな研究領域を切り拓いていくことが可能となったと、としている。

〔４〕論文の総合的評価

本論文は総合的に見て、以下のように評価することができる。

第 1 に、本論文では構造拘束的な体験様式についての従来にない実証的研究である点である。ジェンドリン（Gendlin, E. T.）によって概念化された構造拘束的な体験様式については、人間の精神的健康や心理療法のプロセスを阻害する要因として注目されてきたが、これまでは事例研究を中心とした臨床的研究の中で論じられることがほとんどで、実証的で操作的な手続きによる研究は着手されてこなかった。そうした中で行われた本論文の実証的研究は、体験過程や体験様式といった現象に科学的な光をあてたオリジナリティに富むものであると評価できる。

第 2 に、本論文では構造拘束度尺度（SSB）を開発することによって、これまで臨床的にはさまざまに注目されてきた構造拘束的な体験様式が数量的に測定可能になった点である。本論文の研究によって、SSB の信頼性と妥当性が検証されており、構造拘束的な体験様式とは何かという問題が、実証的で操作的な観点から議論することを可能にしたことも本論文が評価される点である。

第 3 に、構造拘束的な体験様式が、反すう、心的表象との心理的距離といった近年注目されるようになっているさまざまな心理学的要因とどのような関係にあるのかについて検証した点も本論文の特徴である。本論文では種々の調査的手法と実験的手法を組み合わせた検証を繰り返し、構造拘束的な体験様式と反すう、及びネガティブな表象との心理的距離の近さの関係（因果関係の可能性を含む）を見出している。構造拘束的な体験様式をこうした他の変数との関係において検証した成果も、本研究の評価される点である。

第 4 に、構造拘束度尺度（SSB）が臨床的な理論モデル（「吉良モデル」）とどの程度適合度をもっているのかを検証した点も、本論文のユニークな特徴である。こうした検証を通して、臨床的には多くの実践家に支持されている理論モデルが実証的にも妥当なものであることが確認されることで、事例や質的なデータを中心とした臨床的研究と、数量的な実証的研究との間にこれまでにない議論や連携の可能性が開かれたと言える。

最後に、本論文を構成している研究の主要なものは、心理臨床学研究（日本心理臨床学会）、カウンセリング研究（日本カウンセリング学会）、Person-Centered and Experiential Therapies（World Association for Person-Centered and Experiential Psychotherapy and Counseling）といった学術誌のレフリー付き論文に基づくものであり、国内外の臨床心理学分野ではすでに一定の評価を受けている点を補足しておく。

本論文の課題としては、次のことを指摘しておきたい。

第 1 に、本論文の成果は数量的な実証的研究の範囲内にあり、この成果が臨床心理学の

臨床実践の中でどのように貢献できるのかはまだ十分に明らかにされていない。例えば、構造拘束度尺度（SSB）が臨床現場の臨床群に対して構造拘束の程度を判別できるアセスメントツールになり得るのか、といった検証は本論文では行われていないので、そのような臨床的な検討を今後蓄積して行ってほしい。

第 2 に、今回の実証的研究の調査や実験の主な対象は大学生や大学院生であったので、その結果を成人のすべてに一般化することや、臨床群にそのまま当てはめることはできないと考えられる。本論文の結果をより一般化するために、検証の対象をより広げた研究を継続してもらいたい。

第 3 に、臨床心理士でもある高沢氏自身の臨床実践と臨床研究を実証的研究に組み入れることで、今回援用した「吉良モデル」を超えるような「高沢モデル」の構築を視野に入れた質の高い研究を展開していくことが望まれる。

〔5〕論文審査結果

以上により、論文審査小委員会は、高沢佳司氏提出の論文「構造拘束的な体験様式と心理的距離に関する研究」について、博士（学術）の学位が授与されるのに十分な資格を有するものとの結論に達した。

以 上